

「社会主義者」と優生思想

優生思想の確立期において「社会主義者」が（も）かなりの役割を果たしたとかいう言説があります。日本で優生思想を体現したあの悪法「優生保護法」の成立に尽力したのは、「社会党」系の国会議員だったという話もあります。そして、安楽死法の制定策動をしていたのも、自民党に移ったとはいえ、「社会党」系だった議員がいたという事実はあります。

そもそもこれらの言説は、詞の定義もきちんとなさない中で起きていることです。

そもそも「社会主義」とは何か？

そもそも「社会主義とは何か？」ということがあいまいになっているのです。ロシア革命で、「社会主義国家」が成立したという言説があるのですが、レーニンは世界革命なしに社会主義の進展はないと押さえていたのですが、ロシア革命が世界革命へと展開していく回路を失って、新経済政策へ移行したときに、これは国家資本主義だと言っていたのです。それをスターリンが一国でも社会主義建設は可能だとして、ロシアが社会主義を定立したとしたのです。社会主義とは、マルクス／エンゲルスの的には、これはむしろエンゲルスの定義であろうと思うのですが、共産主義への初期的過渡的段階だという定義があるのですが、武装蜂起的なことも含め権力を奪取し、プロレタリア独裁を打ち立て（これはロシアにおいてはソヴィエト労農独裁だったのですが）、そこから世界革命へつながる社会主義の定立へと企てたのですが、ドイツ革命の敗北などという中で挫折し、レーニンの死の中で、そもそもレーニンの中央集権制や革命の防衛の名の下に秘密警察を設立し、また農業政策の貧困の中で、労農独裁が維持できず、結局ソヴィエト独裁が党の独裁に変節し、国家資本主義の頸城に囚われてしまったのです。それを、権力掌握の疑心暗鬼の塊のスターリンがその負の側面だけを純化させ、アーレントのいう全体主義的体制を作り上げたのです。

そもそも、わたしが認識論的に援用している廣松さんは、マルクスは「社会主義」ということばをほとんど使っていないと指摘しているのですが、「共産主義の初期的段階としての社会主義」の意義があるとしても、それは、資本主義の頸城からいまだ脱し得ていない段階であって、そこから、どうやって共産主義志向を維持し展開していくかが問われることなのです。それをスターリンのように、一国社会主義が可能だとしてしまえば、共産主義志向を破棄してしまうことにならざるを得ないのです。

そのようなこととして、「社会主義者」の優生思想とは、資本主義の頸城から脱し得ていないところで起きてくる、共産主義志向を喪失した括弧付きの「社会主義者」でしかなく、そもそも、「共産主義の初期的段階の社会主義」が共産主義志向を維持しようとするならば、社会主義と優生思想はアンチノミーでしかないのです。

そもそも「優生思想」とは何か？

「優生思想」というと、今、国家賠償へと進んだ、断種や堕胎などの優性手術や、ナチスのT4計画などの「障害者」抹殺などを想起するひとが多いのですが、それらは、謂わば、

海に浮かぶ氷山の表に出ている部分で、水面下の巨大な部分として、資本主義的競争原理があるのです。受験ということの中で、学業の成績で比較され、差別選別されていく、それらの構造自体が、優生思想を形成しているのです。小さい頃から、受験ということで、日頃の成績を競い争わされ、常にどちらが上か下かを比べてしまう、どこの大学出身かみたいなことも常に意識してしまう。そんなこと総体が優生思想なのです。

そのことから脱するには、競争原理で成り立っている資本主義社会そのものを問い、資本主義社会そのものを止揚していくことの中にしか、過渡的な試行錯誤しかないのです。かつて、日本の反差別運動を牽引した部落解放運動において、「社会にある差別意識を空気を吸い込むように身に付けてしまう」という定理がありましたが、その差別意識から逃れること容易ではないのですが、それでも、なしていくせめぎ合いの試行錯誤の実践こそが必要なのです。

世界観から「優生思想」を問い直す

今、コモン(とりあえず「公共財」という訳)という詞(註1)が、更めてとり上げられ広がりを見せています。それはヨーロッパの水道事業で、新自由主義的民営化が進む中で、結局事業が民衆にとって劣悪な状況になり、再び公的なものとして取り戻すことが起きています。資本主義の原理は「我が亡き後に洪水よ来れ」で、金儲け主義にまかせてはインフラなどは劣悪になるのです。ですから、インフラなどの公共財は公的なこととして措くことなのです。

ここから、そもそもひとが蓄積してきたインフラのみならず、情報・知的財産なども、コモンとしてとらえることではないか、さらに、公的な蓄積を、「個人」がインプットしていくところで、「自らの能力」という物象化が起きるのですが、この「能力」ということも、ひとの総体的コモンとしてとらえることではないか、というとらえ方もでてくるのです。

そのような考え方からすると、「どちらが能力的に優れているか」と競い合うこと―「優生思想」自体が、ひとつの錯誤のようなこととしてしかとらえられなくなるのです。

反差別から新しい社会への道筋を探る

さて、どうして人類は戦争をなくせないのか、という命題が今特に浮かび上がっています。そもそも支配者が、支配の体制を維持するために暴力装置としての共同幻想体としての国家があり、国家主義を煽ることによって差別排外主義的に分断していく構造があり、そして資本主義の体制の維持のために継続的本源的蓄積(註2)としての差別が必要になるのです。その差別の極としての戦争も国家＝支配の構造として必要になるのです。そもそも差別を煽るひとたちは、ひとが差別社会の極としての殺し合う社会を推奨するのでしょうか？ だから、逆にいうと、反差別というところから、そもそも支配の構造としてある階級社会そのものを止揚していくことが今こそ問われているのです。そして、これまでの社会変革運動がそもそも反差別ということをきちんと立てられなかったが故に、運動が潰れていった歴史をとらえ返し、反差別ということを基底に据えた運動が今、必要になって

いるのです。

(註)

1 「たわしの読書メモ・・・ブログ 621／・岸本聡子『水道、再び公営化！ 欧州・水の闘いから日本が学ぶこと』集英社（集英社新書）2020」「たわしの読書メモ・・・ブログ 620／・斎藤幸平『ゼロからの『資本論』』NHK出版（NHK出版新書）2023」

2 「たわしの読書メモ・・・ブログ 550／・ローザ・ルクセンブルグ／長谷部文雄訳『資本蓄積論 上・中・下巻』岩波書店（岩波文庫）1934」

(み)

(「反差別原論」への断章) (106) としても)